東京白楊だより

第16号
5. 9. 10

函中高二世紀への飛躍を期して…… 学校長 野田義成
思うこと…… 支部長 二上達也
第16回親睦大会報告記 …… 副支部長 菅原大作
評議員会報告…… 理事 梅田やよい
函館の文化に触れる（「女」軸に解く函館近代史・森本貞子） …… 日経新聞記事より
第17回親睦大会フルートとハープによるリラックスコンサート …… 星川龍二

白楊ケ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

函中高二世紀への飛躍を期して

函館中部高等学校長
野田義成

北海道函館中部高等学校に関しまして、白楊ケ丘同窓会の会員の皆様方には日頃より格別の御支援と御協力をいただき、心より感謝申し上げる次第であります。

さて、皆様方すでに御承知の如く私共の母校函館中部高校は、その創立の源を明治二十八年（一八九五年）に遡る、道内公立普通高校二百六十校の中でも最古の歴史と伝統を誇る学校であり、来る平成七年には創立百周年の栄えある慶事を迎えようとしております。現在、函館時任町の白楊ケ丘には、改築中の三代目校舎が近代的な装いも新たに、重厚且つ華麗なる勇姿を日毎に現して来ており、今秋に予定されている新校舎改築落成の暁には、母校函中高は学校建造物としても道内外において名実ともに注目される存在となることは間違いありません。

母校函中高は創立以来百年一世紀の歴史の中で、常に時代と地域の期待に応え、その時々の潮流のなかにあって人間形成の伝統を堅持し先進的で旺盛な教育活動を展開してまいりました。そして、今や母校函中を巣立った二万六千余名に及ぶ同窓の皆様方が、母校在学中は申すに及ばず卒業後も各界において顕著に示されている活躍の軌跡が函中高の名声と存在を世に顕示するものであり、そのことが、また、現在、三代目の校舎で学ぶ後輩等の進むべき道標となり、未来への大きな目標となるものであります。さらに同窓諸氏の活躍を通して得られた人と人とのつながりと心と心の触れ合いこそが、同じ「函館中部」で学んだ者のみが共有する母校愛の原点として「白楊魂」と共に末永く受け継がれて行くものと確信致すものであります。

教育環境が整い、新装なった新しい校舎での教育活動の展開において、函中高がいま求められていることは、単に道南の雄としての「名門函中」の存在を遥かに超えて、北日本における知性と感性の殿堂としての「函館中部高」に大きく飛躍することであります。即ち、そのことは「函中高」が国際的に通用する知的頭脳集団の基盤的教育機関に成長発展することであり、そして、それは現在の函中高の教育施設と教授陣そして集い寄る学生達をもってすれば極めて可能性のある未来像であります。

この度、創立百周年を迎えるに当たり同窓会・後援会が母体となって創立百周年記念協賛会を設立して下さり、百周年の節目を飾ると共に母校函中高の益々の発展を祈念して、「百周年記念会館」の新設を中心とした事業計画を立てて下さいました。白楊ケ丘同窓会の皆様方におかれましては、百周年記念協賛会の活動の趣旨を十分に御理解いただき、母校函中高の二世紀へ向けての一層の発展・興隆のために特段の御支援と御協力を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

趣意書

北海道函館中部高等学校の教育につきましては、日頃より御支援・御協力をいただき深く感謝申し上げます。

さて、本道の発展と歩みを共にし、公立の普通高校としては、道内で最古の歴史と伝統を誇る本校が、明治二十八年の開校以来、平成七年で実に創立百周年の慶事を迎えることになります。

明治・大正・昭和・平成と、時代の変遷を経ながら、この間将来を担う青少年教育の使命に応えて、数多くの優れた人材を輩出し、国の内外を問わずあらゆる分野に送りだして参りました。これも偏に伝統の白楊魂のもと、教職員・生徒のたゆまぬ努力と皆様方の日頃の篤い御支援の賜物と深く感謝いたしております。

時は移ろい、学ぶ生徒は変わっても、自主自立にして自由闊達、常に高きを望み、ひたむきな向上心を持って人生の大道を歩まんとする不撓不屈の函中精神は、正に脈々と受け継がれて来ております。

懸案であった校舎の全面改築も成り、堂々と聳え建つ校舎の偉容、知性と感性を随所に顕示する若き群像、そして日々の学習活動・クラブ活動に伸びやかな中にも自らの向上を目指し、真摯に励む青春の姿を見るにつけても、より一層の教育環境の整備と異なる母校の発展を望まずにはいられません。

そこで創立百周年を迎えるに当たり同窓会・後援会が母体となって創立百周年記念協賛会を設立し、母校百歳の節目を飾ると共に、今後益々の教育効果を期待して、**函中百年記念会館**の新設を中心とした事業計画を策定いたしました。

つきましては、各位には右趣旨を御理解のうえ御賛同賜りたく、出費多端の折、誠に恐縮に存じますが何分の御協力をお願い申し上げます。

平成五年七月吉日

北海道函館中部高等学校
創立百周年記念事業協賛会
会長　藤岡敏彦

同窓生各位

函中百年記念会館

現在、同窓会の財産として運営及び管理をしている白楊ケ丘会館は、90周年の頃山林の売却益金により土地と共に購入しました。昭和50年に建てられた事務所ビルを改築したものです。その後、約10年の間、同窓会の運営により今日に至っております。因みに、平成四年度の利用者数は、千名を越えて、同窓会各期・各クラブOB会・在学生クラブ活動の合宿等、広く使用されておりますが、機能等で著しく使い勝手が悪くなってきております。

そこで今回、百周年に向けての記念事業の一環として、全面改築及び増築を行い、名称も「函中百年記念会館」と改めて、より使い勝手の良いものにしたいと思います。これを機に、広く同窓生にも自由に御利用いただけるように知らしめていきたいと思います。

特に、同期会等には無償でお貸しできますので、御承知ください。

【建物概要】

同窓会会議室（約40帖）　宿泊室　食堂　厨房　和室15帖　シャワー室　男子・女子便所等が完備

思うこと

東京支部長
二上達也

身辺のことを書いてみる。ここ数カ月不祝儀が重なっている。我が年齢を考えると、年ごとにその数が増え、やがて我が身となるのは必定である。それにしても急激なことであった。

一方祝儀の方は初孫が生れたり、次女の婚儀などだから流れから言えば去るがあれば来るありということだ。まあ仕方がないかと思う反面バランス的に少々片寄った気がする。

とにかく物事は行き過ぎる、私はよろず振り子に例えてみる。

右に振れば左に同じだけもどる。その振幅のはばに問題がある。

まん中に停止している状態が必ずしも安定しているとは言えまい。とまってしまったのでは時が進まぬ理屈だし故障しているのだと言える。

現在進行形において停止はものの役に立っていない。そこで人為的に振り動かすのだが弱いと直ぐに止まるし、強いと動揺はなはだしい。丁度いいかげんが難しいところだ。

七十年続いた共産社会も一朝にして崩壊してしまった。その早さは共産独裁の無理がたまっていたせいに違いない。

日本の政治も自民から脱却せんとする動きが出て来た塩梅のように見える。しかし保守同士の対立だけで保守対革新の構図にはならない。やはり日本人の特性がうかがわれる。

と言いながら、ここで政治に触れたところで急にどうなるものではない。組織というものの在り方に考えさせられるわけだが、我が同窓会はどうだろうと結びつけるのは少々飛躍に過ぎるかしらんと思うのである。

難局に当面するとマスコミは首相の指導力を云々する。幸い同窓会ではそんなこともなさそうだし、指導力を要求されるような組織体ではない。

あくまで友好親睦の集まりであってたまたま熱意のあるものが事務処理、連絡などのことに当たっているのである。

その熱意にほだされて私はこの役を引き受けたと書いてしまえばいかにも投げやりな感じになる。全て物ぐさな私が曲りなりに務められるのは大勢の方々のお力添えのお蔭である。

強いて言えば私の立場は帽子みたいなものだと思っている。辞書によれば帽子は「頭にかぶって寒暑ほこりを防ぎ身なりを整えるもの」とある。多少日除けぐらいの役に立つかもしれないので何分とも宜しく。

この際事務局担当役員諸氏の御尽力に感謝し会員皆様の御支援並びに御理解をお願い申し上げます。

評議員について

理事　福津達男（51期）

二上支部長任期中のテーマは組織の充実と一層の活性化であります。

その一環として前支部長より引き継いだ名簿が十五年ぶりで完成、会員の掌握が出来、会の運営に大いに役立つ事となりました。実に四千名を越す大世帯のうち2／3が新制であり着実に新しい世代へ移行しつつあります。

同窓会の活動の源はいうまでもなく各期の評議員の力によるものです。

同期の横の絆が縦の線に繋がり、同窓会が動きだす訳ですから。

評議員はその期の代表であり世話人でもあります。同期の人々の意見を反映し評議員会での決定事項を伝達する橋渡しの人でもあります。

只、残念ながらまだ決まっていない期があります。比較的若い期に多いので無理からぬ事と思いますが、事務局が代行していては期の充実に繋がらないので早急に決めていただきたい。

最も困るのは評議員とは名ばかりでその期の会員に会報や大会の連絡がいき渡っていない事があります。夜遅く迄、編集や荷造りして発送した係の努力と時間が無駄になってしまいます。切手代送料も馬鹿になりません。何よりも会員が振込んでくれた会費の一端であります。

又、転勤その他の理由で評議員が出来ないので事務局で代りの人を探してくれとの問い合わせが来るが、こちらで決めるものではありません。評議員とは期の中から互選で決めるものですから間違いない様お願いしたいと思います。

現在、評議員は30期より93期迄百名を越します。社会的地位や職業の違いは勿論、年齢の違いは親子どころか孫以上であるだけに様々な意見が出るが核心の部分には行っていないというジレンマがあります。為に評議員会の回数を増やす事にしました。

今回、評議員全員にアンケートを出しました主旨は評議員の見直しのお願いと親睦の各種部会の設立と御意見を伺う為です。

人生なかなか順風満帆とはいきません。時には失敗し挫折する事もあります。

同期会はそんな時喜びも悲しみも共通のものとして受け止める事が出来ますが、しかし、同窓会は又一味違ったものでなければならないと思います。先輩達が胸襟を開いて後輩達を暖かく迎え入れ、豊富な人生経験、感動的な生き方を示してくれた時、新旧ガッチリとスクラムを組んだ活力ある同窓会へと発展していくのではないでしょうか。

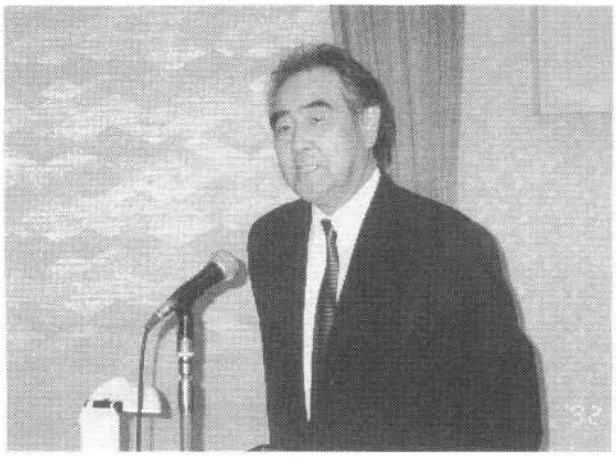
その為にも評議員の積極的・自主的な活動に期待したいと思います。

白楊ケ丘同窓会東京支部
第十六回親睦大会報告記

副支部長　菅原　大作（65期）

白楊ケ丘同窓会東京支部の平成四年度の「第十六回親睦大会」が、十月十五日（木）午後五時より、東京・港区南青山の「東京青山会館」で、来賓及び同窓生約百五十人が出席して行われた。

今回の親睦大会の特別企画は、多摩美術大学教授で、デザイナーの平野拓夫氏が、現代社会におけるデザインとはどのような機能を持ち、どのような役割を果しているか「デザインの役割と活かし方」と題した講演を行った。



平野氏は、昭和二十四年（第五一期）、函中を卒業。東京芸術大学美術学部工芸科を卒業後、通商産業省特許庁に審査官として入庁。昭和三十年日本政府選衡留学生として米国に派遣され、アートセンターデザイン大学でデザインを研究。昭和三十五年平野拓夫設計事務所を設立。現在、平野デザイン設計代表取締役会長のほか、多摩美術大学理事・教授、金沢美術工芸大学客員教授、東京工業大学講師、日本機械デザインセンター理事、通産省グッドデザイン商品選定審査委員、スポーツ産業研究会委員など多方面で幅広く活躍。さらに、平成四年十月には、通産省が行うデザインの普及、向上あるいは国際交流に顕著な功績があった個人を対象としたデザイン功労者（四人）の一人として表彰をされている。

平野氏は、スライドと自身がデザインに参画した品物を提示しながら、概略次のような講演を行った。

「私が東京芸術大学に入学した時は、函中から同期が四人一緒に入った。一つの学校から四人も一緒に入学するということは大変珍しく、函中とはどのような学校だと話題になったが、函館在住の著名な田辺三重松画伯に習ったのが動機と話したら芸大の先生方は納得してくれた。この田辺画伯から、〝お前は英語も、数学も、国語もできないから、絵でも描いたら〟と言われて芸大に入学したが、私を除くほかの三人はいずれも学年トップの方々であった。

芸大を卒業後、通産省に入ったが、当時は日本の輸出額が年々多くなっている時代だった。昭和二十七年頃、ジャパン・バッシングとして日本の商品をボイコットしようという動きが出てきた。そのボイコット方法は、日本の商品はイミテーションが大部分であるというものであった。そこで、デザインを勉強した人間を産業現場に入れるべきであるという通産省の考えが浮上した。

しかし、母校の芸大も図案科や工芸科はあっても、デザイン科がなかったため海外に留学し、研鑽して帰国した。帰国後は、国費で勉強をしたのだからその知識をすべて吐き出せということで、芸大と女子美術大学、金沢美術工芸大学の三つの大学の講師を兼務して、それぞれの学校にデザイン科を創設させられた。

なお、産業の啓発方法を考えろということから、通産省のGマーク（グッドデザイン）制度を立案し、制度化した。

日本の産業は、効率主義やマーケットリサーチにより、集中的に製品を作るという無駄のない形でここまで成長してきたが、五～六年前から〝人にやさしい〟とか〝文化〟などの言葉に代表されるような物づくりを考えようという時代に入り、それ以来、ハードやソフトという言葉が出てきた。そして、このハードとソフトのかかわり、つまり技術と人との接点はデザインであろうということで、いろいろな企業がデザインを経営戦略の一つに加えるという時代になってきた。

そこで、デザインの具体例として手がけたある企業の製品のできるまでの事例を紹介する。」とスライドを用いて、事務用ファイルやタイプライター、ラベルライター、企業のシンボルマークなどのデザインの考え方のほか、工場や最高裁判所の大法廷のデザインなどを例示しながら解説した。

さらに、現代におけるデザインの考え方について、「昔は、デザインというと、ある形がエンジニアの手によってできてくると、その形に応じて色や模様を考えるのがデザインであったが、徐々に人間の側に近づいてきて、どのようにしたら持ちやすいか、どのような文字にしたら目が疲れないか、あるいはトースターの焼き上がりの際にどのような音がするのが良いのかなど、人間の感性に訴えるものを考えることもデザインの重要な仕事となった。また、コンピュータのソフト開発もデザインの一つであり、言わば人間と機械、人間と事柄の橋渡しをするものがデザインである。つまり、ポスターや建築、自動車、シャツなどもデザインであり、マニキュアで色を塗ることもデザインである。

ただし、ある製品をデザインする時には、その品物が何個売れたら原材料費や設備投資に要した金額が回収でき、それ以後利益が上がるかという分岐点を設定し、それに基づいて製品化を進めることもデザインの重要な仕事である。製品作りの構想からコスト計算、販売戦略までがデザインの仕事となる。

もっとも、最近デザインの仕事が難しくなってきたのは、環境問題を考慮に入

れなければならなくなったことである。すなわち、製品をデザインする際に、その品物を使い終わって壊した時、使える部品と使えない部品に区分けする必要がある。そのため区分けしやすい設計にする。あるいは、リサイクルの時に、ある部品だけを代えれば使えるようにするということもデザインの分野に含まれてきている。

また、企業内では、マーケットリサーチの崩壊と技術革新の進展、作れば売れた時代の大量生産が通用しなくなった。そこで、企業内あるいは企業グループが持っている最新鋭の技術を横断的に活用して製品化を行う、あるいは総合的にまとめて新しい事業を開発することも、デザインの仕事の一つとなった。」と、現代社会におけるデザインの果す役割を具体例をもとに非常にわかりやすく解説したほか、海外留学時に通産省からの生活費の送金が遅れて生活に困り、アルバイトでアメリカタバコの〝ケント〟のデザインをしたことや函館時代の思い出などをユーモア交じりに講演。聴衆に感銘を与えた。会場には、約八十人が出席、熱心に聴講した。

平野氏の講演の後、会場を代えて、六時過ぎより、懇親大会に入った。

懇親大会は、第六九期・梅田やよいさんと第七七期・青木和彦氏の司会で進められたが、開会に先立って「函館中学校校歌（同窓会歌）」を、第六九期・米木かおりさんのピアノ伴奏により全員で合唱。大会の雰囲気を盛り上げた。

次いで、支部長の第五二期・二上達也氏が、「三年後の平成七年には、母校の創立百周年を迎える。その記念事業が同窓会を中心として計画をされているが、記念事業の推進にあたっては会員各位のご支援、ご鞭撻をお願いしたい。

また、本年三月には、白楊ケ丘同窓会東京支部の会員名簿を発刊することができた。こうした名簿を整えることで、会員相互の一層の親睦を深めることができればと考えている。

なお、東京支部は、執行部を始め、大会役員も若返りを計ってきた。そのため、何かとご不満があろうかと思われるが、諸先輩にはご支援、ご指導をたまわりたい。」と、あいさつした。

次に、あいさつに立った野田義成函館中部高等学校長（第五五期）は、「母校が創立されたのは明治二十八年だが、最初の校舎は元町にあった。明治三十九年一月に現在地に移転したが、その時に校舎の周囲にポプラの木を植えたという。これが、白楊（ポプラ）ケ丘同窓会という名称の由来となっている。

母校の卒業生は、平成三年三月で、二六、一八五人（全日制二二、三〇三人、定時制三、八八二人）になる。うち、旧制中学校卒業生は、およそ四千九百人である。今、北海道に公立高校が二八五校あるが、このうち本校より歴史があるのは函館商業高校の百七年だけで、この後が札幌南と本校の九十七年である。

本校の現在の生徒数は、一学年九学級・二七クラス・一、一六六人（男六三〇人、女五三六人）である。一時は、女子が多くなり、女子校化するのではないかと危惧されたが、今のところ男子が上回っている。

学校の雰囲気は、先輩諸氏の影響もあって自由闊達である。もちろん勉強も頑張っており、今年三月の卒業生三八九人のうち、国公立大学に一四三人、私立大学一四四人、短大五七人、専修学校に二〇人が進学した。また、運動面においても、今年の春の野球大会で十九年振りに地区優勝した。

今、新校舎が改築されつつある。昭和二十九年の卒業生までが勉強していた木造校舎のうち、旧雨天体操場が残っていたが、これを含めその後建てられた校舎も体育館を除いて全面的に改築されることになっており、今度は白楊ケ丘三代目の校舎ということになる。

新校舎は、全体のデザインが函館山をイメージし、正面玄関は旧函館公会堂のイメージである。この公会堂を、かつて中部高校の回りに立っていたポプラの大樹を表す四本の大きな柱が正面をがっちりと支えている。重厚にしてかつ華麗なデザインで、道内二八五校に中でも、中部ほど新しい息吹を感じさせる校舎はないといっても過言ではない。

今後とも、先輩達が培った百年の伝統と校風・白楊魂をしっかりと受け継いで行きたい。先輩諸氏の一層のご支援をたまわりたい。」と述べた。

次に、来賓として出席された岩船寛函館市東京事務所長、藤岡敏彦白楊ケ丘同窓会長、近藤達也白楊ケ丘同窓会函館支部長、守下光越白楊ケ丘同窓会事務局長をそれぞれ紹介。

来賓を代表して、藤岡会長が「平成七年の母校百周年の記念式典を、同年十月十四日（土）に行う予定だが、東京支部の皆さんもぜひご出席いただきたい。いろいろな記念事業を計画しているが、事業の推進にあたっては寄付をお願いすることになるがよろしくお願いしたい。各種事業のうち、すでに名簿作りと百周年の記念誌作りに着手したが、ご協力をお願いしたい。今後とも東京支部の一層の発展と会員各位のご活躍を期待する。」と祝辞を述べた。

また、岩船東京事務所長は、木戸浦隆一函館市長の祝電として、「白楊ケ丘同窓会東京支部第十六回大会のご盛会を心からお喜び申し上げます。日頃より皆様には企業誘致についての情報提供など函館市政発展にご尽力たまわり、厚く御礼申し上げます。今後とも二十一世紀へ向けた活力と潤いのある郷土・函館の建設のため、努力する所存ですので、皆様のより一層のご支援、ご指導をたまわりますようお願い申し上げます。貴会の今後ますますのご発展と会員皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。」を朗読

した後、函館市の最近の状況について、「函館市の昨年の観光客が過去最高の五百十万人を記録し、空前のブームとなっている。しかしながら、観光産業は、何かのきっかけで減少してしまうというもろい面を持っている。当座の財政を賄うためには観光産業は大変重要ではあるが、財政基盤を固める上からも基幹産業となる二次産業の振興を図って行かなければならない。函館市では企業誘致を積極的に進めているが、東京事務所は皆様のご相談を受けると同時に、企業誘致と官公庁とのパイプ役として仕事を行っている。企業誘致に関する情報があれば、東京事務所へご連絡いただきたい。

また、中部高校は百周年ということだが、今年は函館市が市になって七十周年を迎えた。これを記念した写真集〝函館都市の記録〟が出版された。ぜひご高覧いただきたい。」と、述べた。

この後、第四五期・田沼修二氏の音頭で乾杯し、懇親会に移った。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所から寄贈を受けた函館山からの夜景や函館港、湯の川温泉、元町など、近郊の景観などをデザインした観光ポスターが多数貼られて雰囲気を盛り上げた。そのほか、七飯町の〝函館ワイン（市寄贈）〟なども豊富に用意された。

一年振りあるいは久し振りに顔を会わせた会員の間で交流が行われ、会場内の随所で懐しい函館弁が聞かれるとともに終始和やかな雰囲気に包まれていたが、懇親会の合間には、今回ピアノを担当された第六九期・米木さんのお得意のピアノ曲のソロも披露された。

そして、宴が最高に盛り上がった頃、ここ数年の恒例となっている寄贈品の抽選会に移った。今回も、同窓会特別賞は、北海道産のジャガイモを産地より自宅へ直送するという目玉賞品のほか、約八十点もの洋酒やテレホンカード、雑貨類などが用意された。会場内では、同期の仲間に賞品が当たると周囲から大きな歓声が上がり、一段と雰囲気が盛り上がっていた。

抽選会の終了後、第六〇期の北原耕太郎氏が閉会のあいさつを述べ、大会の最後を締め括る函館中部高等学校校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約束して、午後九時過ぎ終了、散会した。

白楊ケ丘同窓会東京支部ゴルフ部会
〝ポプラ会〟第一回開催
平成五年十一月九日（火）・GMG八王子に決定

昨年来より提案されておりました同窓会のゴルフ部会について評議員を対象にアンケート調査を行ない、80通中60人の方から返信をいただきました。その内自らの参加と同期の仲間を参加させるを合わせ約30名の方々から御賛同を得られ、去る六月二十七日、少数ではありましたが打ち合わせを兼ねてゴルフ会を発足させ、〝第一回目のコンペは平成五年十一月九日（火）GMG八王子七組・九時半スタートの開催を決定〟致しました。

●決定事項（概略）

一、会名・「ポプラ会」
二、会員・同窓会会員の方々すべて
三、目的・会員相互の友好と親睦
四、会長・東京支部支部長兼任
五、運営・支部役員と理事有志
六、開催・年二回、春は四月三週平日
　　秋は十月一週平日
七、競技・18ホールストロークプレイ
　・ダブルペリアハンデキャップ
八、幹事・コンペの総合優勝者とその同期の方々（ただし一回限りとし次回再び優勝者が出た場合は他の期が担当する）
九、表彰・総合優勝（年齢別無し）
　・年齢別優勝（3クラス分け）
　・レディス優勝
　・優秀同期賞（3名のネットスコア合計が優秀な期を表彰）
　・その他順位、飛び賞、特別賞
十、会費・表彰費三千円
　・パーティ費三千円
十一、参加方法
　・第一回目、(イ)会報にて案内告知、(ロ)評議員が各期毎に参加者をまとめる、(ハ)本大会会場にて最終確認（十月十五日）
　・第二回目以降は評議員に通知後各期毎にまとめる。又は個人で申し込みも可。

尚、今回の第一回目に限り、参加者数が予測をし難い事と運営的に手慣れていない為、七組28名迄の人数制限をする事になりました。数人以上の参加を希望される期もあろうかと思いますが、幅広い交流を目的とし、老いも若きも一緒になってこそ同窓会としての意味があろうかと考えておりますので、各期3名までの申し込みにしたいと思います。ただし人数に達しない時にはその限りではありませんので評議員の方にはその節御協力をお願い致します。

又競技方法、幹事の決め方、表彰の方法、会費のあり方等に御意見がありましたらお申しつけ下さい。概略決定ですから詳細については皆様のご意見を反映していきたいと考えております。

開催当日の集合時間、交通利用法、組み合わせは十月十五日の本大会会場にて御案内申し上げます。尚コンペに関する連絡は副支部長小林嘉則（03－3411－1241）まで

平成５年度
評議員会報告書

平成５年度第１回の評議員会が、５月14日「スクワール麹町」に於て開かれた。

82名の評議員中、30名の出席で午後６時30分、二上達也支部長の挨拶のあと、20分間程の軽い夕食を済ませ、午後７時より８時30分まで下記議案を基に、会議が進められた。

＜議　案＞

１．平成４年度事業・会計報告
２．平成５年度事業計画（案）収支予算（案）
３．理事の選任
４．その他
　(1)　アンケート集計結果報告　　(2)　名簿の訂正
　(3)　名簿残部およびテレホンカードの扱い
　(4)　会報原稿依頼　　(5)　その他

会議は吉田淑子副支部長が進行。以下に抜粋報告します。

１．４年度事業・会計報告は、配られた資料に基づいて、三國比左男副支部長より事業報告、真船昭理事より決算報告があった。その後、田沼修二監事より会計監査が報告され、承認された。

２．三國副支部長より、５年度事業計画および収支予算の説明があった。

　１．２に関する質疑事項・補足事項として、主に、

◇楊燈会（定時制）のとりまとめに適当な人が見つからずにいたが、４人程函館から推薦して貰ったので近々、福津達男理事が当たってみる。

◇５年度予算の支出が増えている理由は、運営費は評議員会を年１回から２回に、また、本部派遣費は百周年に向けての打ち合わせが多くなるため。

◇名簿製作の経費が計上されていないのは、全て広告料で賄ったため。従って、売上金は雑収入となる。

◇会費の徴収を効率よくできれば、２千円という金額を見直す時期にきているのではないか。

　・・・などが話し合われた。

◎その後、二上支部長より５年度案の承認を求められ、全員の拍手をもって承認された。

３．理事選任については二上支部長より、北原耕太郎副支部長および水沢房子理事の退任に伴い、63期土橋道子、69期梅田やよいの２名を新たに選任したい旨の報告があり、異議なく承認された。

４．その他(1) (2) (4)に関しては、小林嘉則副支部長より報告があった。

　(1)組織強化の目的で全評議員にアンケート調査を実施（21名返答なし）。その統計結果が資料として配られた。アンケート中の、アドレスシールに関連して次のような質疑があった。

◇同期で関心のない人には連絡する必要を認めないので、名簿から削除したい。

◇会員名簿で重複する部分がある。（本部支部双方に掲載されるため）

◇名簿に載っている人全員に往復葉書を出して、消息の有無を確かめたい。

◇東京支部会員名簿は関東在住者となっているのに、それ以外の人も載っているのはおかしい。

※この件については、今まで何度か議論されたが、東北から関西まで一緒になっている期、青森から沖縄までの期等、各期まちまちなので、判断は各期の評議員に任せるという結論が出ている。

なお、以上はいずれも、30〜40期代の評議員による意見であった。

　(2) (4)については、各自に配られた名簿に朱書きで訂正の上、依頼原稿とともに返送願いたい旨の連絡。

　(3)について、福津理事より、

◇名簿の残部が多数あるので各期で有効に使ってほしい。

◇テレホンカードも９５０枚程残っているが、原価でいいから売却してほしい。との２件が相談され、即、名案が出なかったため、理事会に解決を一任し、あとで評議員に連絡してもらうという形になった。

◎ほかの意見・質問も出て、未解決の問題も残ったが、会場の時間切れのため、続きは次回へ繰越しとして、午後８時30分閉会した。

☆なお、この評議員会開催に先立ち、１月28日および４月26日の２回に渡り、打ち合わせのための理事会が、支部事務局において行われている。(報告まとめ　梅田やよい)

白楊ケ丘同窓会
札幌支部大会に出席して

54期　杉田　博子

平成五年六月二十六日、札幌セントラルパークに於いて札幌支部大会が行われ、二上支部長代理として出席しました。総会では亡くなられた会員に対しての黙祷に始まり、三浦支部長の議長選出で事業報告、会計報告が行われました。札幌では熟年会員に対して65歳以上二万円、70歳以上一万五千円、80歳以上一万円の終身会費制度が導入されているとのことでした。懇親会では出席者の長老24期の厨川様の乾杯の音頭に始まり、プロの余興があり三浦支部長の歌も出て楽しい雰囲気の中で、先輩の方々の再会の喜び方が、とても印象的でした。特に懇親会の間中、ずうっと写されていた、懐かしい中部高校の旧体育館の映像に、可愛がっていただいた春木先生、溝江先生の体育の時間が、つい先日のように思われて、四十年の歳月の流れに、感慨無量でした。どこの支部も同じですが、若い世代の地域との密着が薄いこともあり、熟年の参加者が多く、若い人達の活躍が望まれました。札幌支部大会には初めて出席させていただいたおかげで、卒業以来の同期生とも同席出来、二次会へと楽しいひとときを過ごさせていただきました。帰途お墓参りをかねて、函館へも立ち寄ることも出来ました。正しく、副支部長冥利に尽きたということでしょうか?。

梅雨晴れの故山迫りて着陸す　博子

函館の文化に触れる

――日本経済新聞の記事より抜粋――

無名作家に光あてた函館文学魂

異国情緒あふれる港町函館市に平成五年四月、「函館市文学館」がオープンした。大手信販のジャックスが寄贈した大正モダニズム建築を、函館市が建造物の美的な外観を生かしながらしゃれた文学館に改造した。ここには石川啄木の一級資料をはじめ、地元ゆかりの十六人の作家の資料が展示されている。

一九九〇年十月十日、夫人と幼い三人の子供を残し、四十歳そこそこで自殺した佐藤泰志という作家をご存じだろうか。早熟な作家だった。中学生の時から小説家を志望し、大学卒業後は職にもつかずに一途に小説を書いた芥川賞候補に何回もあげられながら惜しくも逃がした。

開館した函館市文学館には、一階の奥に佐藤泰志コーナーがあり、見学者を集めていた。子供のころからの写真、処女作『きみの鳥はうたえる』の生原稿、函館西高校時代の文芸部誌、創作ノート、ボロボロになった愛用の広辞苑、文鎮などの遺品が展示されている。

とりわけ目を引くのが旭中学二年生の時にガリ版刷りの文集に載せた作品だ。少年とは思えぬ文章で、自分の将来の青写真を描いている。四十代で芥川賞をとり、六十代でノーベル文学賞を受賞し、百二歳まで長生きして、小説五十二冊など百冊近い本を出すという壮大な夢である。

しかし現実に残した本は『そこのみて光輝く』『移動動物園』『海炭市叙景』などわずか六冊。それもほとんどが絶版か店頭から消えてしまった。

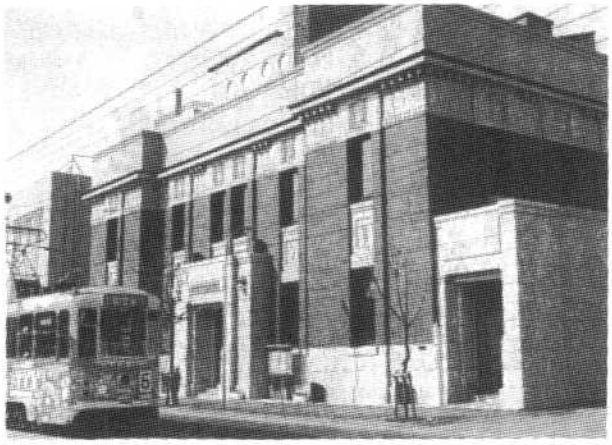
普通ならこうした作家は死後間もなくして忘れられていく運命にある。ところが函館市文学館は、石川啄木、今東光、長谷川海太郎（林不忘・牧逸馬・谷譲次のペンネームで有名）、久生十蘭（ひさお・じゅうらん）、今日出海、亀井勝一郎、長谷川四郎、井上光晴らの有名作家と並んで、佐藤泰志を大きくとりあげた。

人選は市の教育委員会が行ったものだが、これは卓見といってもよい。なぜなら作品を読めばわかるのだが、佐藤泰志こそ、故郷の街の風景や、そこに生きる人々の底深い無言の悲しみや無垢なる魂を描いた函館の作家だからだ。

例えば遺作となった『海炭市叙景』を読んでみよう。読者は心の琴線にふれるはずだ。

登場人物の貧しい兄と妹はこんな会話をする。「おまえは夜景を眺めたことは何度ある、とそれから兄はたずねた。（中略）兄さんはどうなの。兄は、そうだな、俺は一度もない、と答えた。それでまた笑いあった。（中略）この街に住んでいる人々は、その夜景の無数の光のひとつでしかない。光がひとつ消えることや、ひとつ増えることは、ここを訪れる人々にとって、どうでもいいことに違いない」。

佐藤泰志は上京し、作家をめざした。しかしその志は中途で挫折し、遺体は函館に戻った。その文学への熱い思いは、死後、今度は文学館の中でよみがえった。ここ数年文学館ブームで、文学館は全国に二百近くあるといわれるが、文学館をたんなる文学史の博物館にしてはならない。こうした生ける文学空間とすべきだろう。



函館は昔から生きた文学の街だった。文学館もこの雰囲気をかもし出している。建物は明治・大正建築が多く残る末広町の市電通りにあり、有名な十字街からも近い。大正十年（一九二一）に第一銀行函館支店として建てられたれんがとコンクリート造りのモダニズム建築を使っている。もともとここは大手信販会社、ジャックス（旧社名北日本信販販売）の社屋として八九年まで使われていた。

全国でも有数な文学館ができた背景には、函館にすぐれた文学的土壌があったからともいえる。啄木が永眠する土地とあって、啄木研究は活発で、大正時代から函館啄木会が結成され、多くの資料が収集されてきた。また二十年続いている函館文学学校や、昨年亡くなった井上光晴が主宰した函館文学伝習所など文学サークル活動も活発だ。同人誌や歌誌は、『函館文学』『晨（しん）』『青の時代』『まど』『潮』など数多い。

新しい世代も育っている。ロックミュージシャンから作家に転身し、『ピアニシモ』や『クラウディ』を出した辻仁成は、一九五九年生まれで、佐藤泰志と同じ函館西高校出身だ。

函館市文学館の開館に際しては、作家の遺族などから千五百点余りの資料が寄せられた。例えば『新青年』系の伝奇作家としていま再評価されている久生十蘭の遺族からは、直木賞の賞状や愛用のマージャンパイなどが文学資料とともに寄贈された。

また『ロルカ詩集』の翻訳や小説で知られる長谷川四郎の遺族からも二千枚近い生原稿や原書四百冊が送られてきた。現存作家として展示されている辻仁成も、生原稿や函館西高校時代の生徒手帳を寄贈。逆に資料が思うように集まらず、展示しなかった函館ゆかりの作家はまだいるという。渡辺館長は「資料の収集、展示の拡充など文学館づくりはまだこれからです」と話している。

（平成五年五月二十二日掲載）

「女」軸に解く函館近代史

◇幕末開港の国際都市は自由かっ達さ充満◇

ノンフィクションライター
森本　貞子

●港で働いていた女房衆

幕末から昭和九年までユニオンジャック旗を掲げ続けたイギリス領事館は、港町函館を象徴する光景だった。火災のため何度か移転した後、大正二年に函館市元町に建てられた領事館の建物は昭和五十四年に有形文化財になる。この洋館が平成四年八月一日、『函館市旧イギリス領事館（開港記念館）』として新しく生まれ変わった。

記念館の一、二階の展示室には、ペリー提督が函館に来航した際の乗船ポーハタン号の模型や、写真、ミニチュアモデルなどを展示してあり、激動の時代の函館史やイギリスなど諸外国との交流の様子を知ることができる。「女性」を軸に函館の近代史を長い間調べていた私は、この開港記念館の展示の監修を手がけた。

函館出身の私は、ものごころついたころから、母や祖母などまわりの函館の女性たちが他の地域の女性とひどく違っているのを不思議に思っていた。臆（おく）することなく何でも言うし、当時からダイヤの指輪をはめたり、お年寄りでもバターやコーヒーを好んで口にする。考え方が非常に自由でたくましいのだ。こんな「函館女」の気質は、函館の地理的条件と幕末の開港後、いち早く西洋文化に接した影響が大きい。

開港当時の函館には各国の領事館が立ち並び、外国人の商人や宣教師が日本人と雑居していた。全国から集まった移民の町で古い因習もなかったせいか、新しい西洋文化はすんなりと町に溶け込んでいった。また漁で長く家を空ける男たちに代わって、浜の日雇い労働や町工場で働き、家庭を守っていたのは「函館女」だったのだ。

ところが一般に函館の女は「どうにもならないわがまま女」でかたづけられてしまい、北海道の各市町村は「クラーク博士、アイヌ、刑務所、屯田兵」といったイメージで十把ひとからげにされてしまう。そんな現状に不満を感じ、私はいつからか函館に関する資料を片っ端から読み集めるようになった。

●一人の女性掘り下げ本に

昭和五十六年にようやくその思いを「女の海溝―トネ・ミルンの青春」という本にまとめた。直接のきっかけになったのは母だった。私が三十三歳の時に父が亡くなり、母は詐欺にあって始めたばかりの事業に失敗してしまったのだ。

「言葉の裏を読む」習慣のなかった函館人の中にはこうした被害にあう者が少なくなかった。五歳の時からは両親と共に東京で暮らし、私は客観的に函館人を見つつ彼らを理解できた。トネという一人の女性に凝縮した「函館」を書いてみようと決意したのはこの時である。

トネ・ミルン（堀川とね）は、幕末の一八六〇年に願乗寺（今の西別院）の住職の娘として函館に生まれた。歯に衣きせずにものを言い、イエス・ノーがはっきりしている。このように進取の気性に富んでいたことが、在学していた開拓使女学校で「一生治らぬ脳の病」と診断されて函館に戻された遠因でもあったようだ。後に日本の地震学の父と呼ばれる英国人ジョン・ミルンと結婚、英語の能力を生かして地震の仕事を手伝う。トネ・ミルンは、地理的条件と開国という時代が交錯した函館が生んだ典型的な女性である。私は単なる伝記を書くつもりはなかった。一人の女性を軸にして、今まで男性が書いてきた「正史」を違う視点でとらえてみたかったのだ。

●「記念館」展示を監修

函館市長から開港記念館の展示監修の依頼が来たのは平成三年十一月。丸十八年かけた本の取材と函館に対する情熱を見込まれてのことだ。翌年八月に開館するまでに展示物の細かい装飾や説明文の添削などについて幾度打ち合わせをしただろう。

例えばトネが英国のユースデン領事夫妻らと七夕祭りを楽しむミニチュア人形の展示では、「ユースデン夫人の髪形はどうすればよいでしょうか」と問い合わせがくる。史実を忠実に再現するために、自分で集めた資料の中からユースデン夫人を描いた当時の浮世絵を探し出した。ほとんどの人形の髪形や洋服は、こうした資料を参考にデザインした。

本の執筆のために膨大な資料を集めていたおかげで、幕末からの函館については大抵のことに答えられる自信はあった。記念館の監修にあたり悩んだのは、七夕祭りに登場する米国人、フレーターのゆかたの柄くらいだろうか。

外国人だからモダンなゆかたを着せたかったが、同時に史実に即したものでなくてはならない。どうしたものかと考えていた時に、銀座八丁目会会長に誘われて行った能の金春会祭りで偶然にその答えを見つけることができた。小さな円を花のように並べた金春会の紋をあしらったゆかたは、紺地に染められた白い水玉のように見える。しゃれているし、金春の紋ならば、史実に逆らうこともない。早速これを参考にゆかたのデザインをした。

ミニチュア人形の製作は、日本人形で有名な会社が担当した。ふだんは日本人形しか作らないため、青い目がない。ユースデン夫人やフレーターの人形の目には大変苦労したと聞く。

●生活や時代背景身近に

開港記念館二階の展示では、トネ自身が函館の近代史を語る形式になっている。トネの人生を歴史を解く「カギ」にして、当時の生活や時代背景をより身近に感じてもらう趣向だ。初めて蒸気力を使った製材所や五稜郭からの氷の切り出しの様子など、写真も多く交えて函館を概観できるように工夫した。

幕末の函館を写した一組の写真がある。昭和五十五年に非売品として出版された写真集に収録してあるもので、オリジナルは函館図書館が所蔵する。ところが驚いたことに現在ではその二枚続きの写真の半分がなくなっている。本の取材中に手に入れていた写真集が思わぬところで役に立った。

展示資料の大半は、十八年間かけて私が集めたものだ。何十冊の本の中からたった一枚の「探しもの」を見つける作業の繰り返しで、現在は手に入らないものも多い。貴重な資料を数多く集めた開港記念館の設立で、「国際都市」函館の歴史を多くの人に知っていただければ幸いだ。

（平成四年九月三十日掲載）

各期だより

東京函八会（三五期・昭和八年卒）

来る八月二六日函館郊外湯の川温泉「ホテル入川」で、昭和八年卒業六十周年記念大会が開催されるので、毎年恒例の春の「東京函八会」は見合せることになった。

八月の大会には、東京からも十数名出席し、既に二九名の参加申込があり、盛会が予想される。（藪越甲平記）

第四十三期（昭和16年卒）

今年の全国合同同期会は、六月五日から一泊で大沼リゾート白樺において同伴の夫人、物故者未亡人の女性八人を交え、三十九人の出席をみて開催された。

昨年札幌で開催してから一年間に亡くなった五名を加えた物故者に対する黙祷の後、函館・東京・札幌の幹事からの挨拶と報告に続いて、母校百周年の寄付金百万円の募集方法について協議した後、宴会に移った。

卒業以来五十二年振りに顔を合わせる者、舞鶴から小樽までフェリーに三十時間も乗ってきた人、また群発地震の中にもかかわらず伊東市から駆けつけた友もいて、函中時代の話や孫の話などに花を咲かせ、七十歳の老人達はかつての白楊魂を感じさせる元気さを示していた。

八時からは場所を変えて二次会になり飲み直しのグループ、麻雀卓を囲んだグループと深夜まで時間の経過を忘れる有様であった。

翌朝八時の朝食後、来年東京での再会を約して解散した。（井筒吉彦記）

翠楊会（第45期・昭和18年卒）

翠楊会東京支部の総会は平成四年十月二十九日青山のＮＨＫ寮で開催、二十一名が参会、函館の本部から犬島豊、福士長蔵両君も駆けつけ懐旧談に花が咲いた。

平成五年は卒業五十年に当るので十月十日全国の会員が函館に集い、盛大な記念大会を開くことにしている。回顧と懇親をかねて市電を借り切り、寿司のカウンターを持ち込んで寿司を摘みながら市内一周という楽しい企画もある。また大会のあと、戦争でお預けになったままの五十年遅れの修学旅行を、檜山・乙部への一泊旅行で実現することになった。

ところで、翠楊会員で元白楊ケ丘同窓会東京支部長の池田和行君が、四十数年にわたる句作の中から、母校の名に因む「句集・白楊」を邑書林の現代俳句選集として上梓された。誠実な、きめ細かい作風は、作者の人柄を物語っている。

また、やはり翠楊会員で京都在住の花井四郎君が東方書店から「黄土に生まれた酒－中国酒、その技術と歴史」を刊行した。花井氏は北大で農芸化学を学び、宝酒造に入社、取締役技術部長、研究部長等を歴任。醗酵化学の研究で農学博士号を受けている。本書はこの分野では初めて、黄河文明の先史時代から現代に至るまで、中国の酒造の総てを解明した労作である。なお本書の中の中国古典籍の解読には、函中同級の天理大学中国学科の桑山龍平教授が協力しているという、同級生として誇らしいエピソードも秘められている。（田沼修二記）

東楊会（第48期・昭和20年卒）

平成五年度48期同期会は四月十七日（日）五時半から銀座安具楽五合庵で恒例のとおり開催し、諸氏の健康と近況を確認し合い、再会を約して解散した。（武田好司記）

あずまし会（第51期・昭和23・24年卒）

・総会

5年4月9日　番町グリーンパレス

参加15名

例年のとおりの時期、会場で行われ、札幌から「どんじり会札幌支部」の幹事が出席、来る7月16日の「卒業45周年記念札幌大会」の詳細説明と内地勢の多数参加の要請がなされ、誘い合わせて多くが参加しようと約して散会した。

・どんじり会札幌大会に参加

函中どんじり会の卒業45周年記念全国大会が7月16日札幌市「札幌サンプラザ」において、同伴者を含め93名（内あずまし会21名）が参加、来賓として丹治敏衛先生、白楊ケ丘同窓会三浦札幌支部長臨席のもと盛大に開催された。

高島　巌君の記念講演「禿のはなし」に始まり、記念撮影、プレパーティの後総会・祝賀会に入り、物故者64名に対しての黙祷、大会長歓迎挨拶、恩師、来賓、どんじり会長と挨拶が続き、次いで副大会長により「大会宣言」声高らかに読み上げられ、厳粛裡に総会が終了。いよいよ祝宴に入り、出席者の紹介、各支部代表の余興があって盛り上がったが、何といっても圧巻は、苦心の作在校中のビデオの放映であった。

個人の顔がクローズアップされるたび

に歓声が上がり、戦中の学徒動員の苦労、故人の想い出、戦後の自由を謳歌した話等に花が咲いた。

同窓会歌斉唱、エールの交換で祝宴は終わったが、二次会場に移ってからも老いを忘れて歓談、放歌高吟が深更に及んだ。何しろ全館貸切りというあずましさが大いに物を言ったのであろう。ゴルフ組は当日早朝雨中のコンペ（4組）があったにもかかわらず、疲れを知らぬ猛者振りであった。

翌日は快晴に恵まれ、貸切りバスでの小樽観光、裕次郎記念館、小樽運河、ガラス工芸館、旧青山別邸等巡りを楽しみ、獲れたばかりのシーフードの昼食に満腹、午後3時札幌駅で、50周年函館大会にも元気で集まろうと誓い合って、名残を惜しみつつ解散した。

札幌の幹事諸兄が二年前から企画準備しただけあって、用意周到、微に入り細に入っての歓待にただただ感激するばかり、一例を上げれば、数々の記念品の中に、想い出の銘菓とあって「乾パン・谷田のきび団子」が添えられていたという心憎さであった。（三国比左男記）

玄羊会（52期・昭和25年卒）

二月十三日、福沢君の十三回忌と瀧川君の七回忌をニュー東京・中華飯店「桃杏樓」で行い故人を偲んだ。

参加者二十五名、函館から田中君も馳せ参じ、又故人と親交のあったどんじり会の三國先輩も出席してくれた。

両君とも闊達で実に賑やかな男だった。それだけに話題は盡きず、それぞれの思い出を語りつくした。

玄羊会の記念誌を最后迄楽しみにしていた福沢君。棺に記念誌のゲラ刷りと、好きなウイスキーを入れた13年前の春爛漫の花見どきであったのがつい昨日の様に思える。

又、お通夜に瀧川君の歌を皆涙しながら聞いた「君は心の妻だから」既に死期を覚悟して、ひそかにテープに吹き込んだものだった。あれから7年も過ったとは思えない。

しかし、福沢君が溺愛した一人娘の真理子さんも嫁ぎ、瀧川君の御子息も四月に結婚するという。

月日の流れをつくづく感ずる。

（福津達男記）

同期会喧噪記（第54期・昭和27年卒）

新宿西口のパブ・FANFANは立錐の余地なく、喧噪は耳をも聾さんばかりであった。年に一度の同期会。北海道・関西・九州からの参加も加えて三十余名の一人も欠けぬ二次会である。

パブの入口でヒロコさんに原稿提出を指示された。万年幹事の命に否はない。恩義はプラチナより重いのである。

それにしても騒々しい。そろそろ還暦を迎えようという男女の発する音は、小学生の修学旅行の比ではない。でも還暦集団でよかった。肺活量の大きい若者集団なら酸欠状態確実の混みようである。

「会費を出せ。」「いくらだ」「三千円」「アンタどっちのテーブル？」「カタイこと言うな」「乾杯、乾杯」「もう済ませた」「早く」。

つまみが並ぶ。氷の音。グラスの音。喧噪がもりあがり、人が動く。この狭きで席の移動が奇蹟のように出現する。

「カサロウさん、撮ってよ。」アッコさんがウノ君に寄り添う。「オレは公式記録員だ。気安く言うな」とパチリ。「忘れずに送ってよ。」「うん、撮れてたらな。」一次会と移動の路上で二本のフィルムを消費したが、果して写ってくれたろうか。

大学教授のキュウノ君がどっしり構える。「オマエのとこの卒業生に聞いたら、オマエを知らなかったぞ」「う……学部が違うんだろ。」「その程度で知られてないんじゃたいしたことないな。」とイシザワ君。「五十四期で顔写真入りポスターを作ろうか。校内に貼るの。」とノブエちゃん。「オマエら、義絶するぞ。」……

札幌から参加したジュンコさん。去年息子の仲人を私がつとめた。「来月カミさんと札幌・函館へ行く。札幌でダブルデートしよう。」「主人は呑むと喰べないの。」「その代りオレは喰うと呑まない。」そこへノブエちゃん。「奥さんはこんな騒ぎでも大丈夫？」「平気、平気」「それじゃ函館ではうんと集めるから。」……

函館から初参加のマサコさん。「私が誰だかわかる？」大見得をきった彼女は、ご主人の三回忌をすませたところだ。自作の油絵に初めて買手が現れたというのに、あまりの安値に売るのを止めたアヤちゃんがニコニコ笑っている。兵庫県の丹波で晴耕雨読のコバヤシ君の酩丁度は、一次直線で上昇中だ。

「共学前のクラス会で共学是非を討論したら一人だけ賛成がいた。」とサワグチ君。「アナタは？」「オレは大勢順応・反対。」「私達も泣いたね」とキョウコさん。「友達と別れるのが辛かったのよ。」とシズコさん。「でも共学でよかった。」とヨウコさん。「女子が少なくて心細かったけど、大切にされたし。」「こんな楽しい会もできるし。」「明日はどこだい？」「木曾路。」……「そろそろ終ろう。」とタムラ幹事長の声がかかった。来年は全員が還暦となる。全員が赤を着て集まろうじゃないか。

不夜城新宿は深夜でも明るいが、人かげは疎である。南口でボウ君、タカハシ君と別れた。「じゃ来年な。」と。来年が来週くるような軽い別れである。一年が一週間程度で経過する年令になったのか。それとも青春への回帰が高速で進行しているのか。いずれにせよ、同期の集いは四十余年の歳月を瞬時に超える。魂の弾みにおいて、これに替る事象はそうざらにはない。

雨あがりの薫風が微醺をなぶる。ほのぼのと爽やかな夜である。（九三・六・十二）

（佐藤正郎記）

福禄会（第56期・昭和29年卒）

「黒川　陸郎君を語る」

去る3月13日夜、56期同期会の設立と発展のためにおおきく貢献したわれらの陸（ろく）さんが逝った。剥離性大動脈瘤という致命率の高い病気であった。

酒を飲み歌い、その活力を余すところなく発散して仕事にも打ち込んでいた時期もあった。同期会関東ブロックの開催に際しても、常に綿密な計画をたて実行へ移すことにこだわりをみせた。定期的な会合以外にたびたび集うことを好み、それがやがて次第に交友の和を広げていき、参加者30～40名の同期会までに発展した。また、「福禄会関東ブロック」として120名ほどの会員を数えるまでに至った。

かれの信条は「人には心、己には味」であった。そして、設計事務所の人事管理のむずかしさをいつも気にかけていた。こまやかな神経の持ち主がいだいていた

ひとへの気配りと、理想としていた職場環境づくりの困難さがやがて精神的な疲労を深めていき、いわゆる「うつ」状態へと追いやっていったように思う。

旅好きの彼とはよく車紀行をやった。十数回にわたって南は飛騨高山周辺から北は道南地方まで、とくに東北地方はほとんどを走り回った。しかし、心まで癒すことはできなかった。来年は卒後40周年記念会が本部と東京で計画されているが、年齢的にもおおきな節目となるのでぜひ出席したいとつねづね語りあっていた。また仕事から解放されたときの気ままな全国一周車の旅も長年の夢であった。

酒がはいると、過去の記録と将来の計画がきちょうめんに記入された分厚い手帳をみせてくれ、それが酒のさかなにもなった。

しかし、人生設計図は未完成のままおわってしまった。

思いどおりにならなかった夢のためにも、死後のもうひとつの世界を信じたい。「花に嵐・・・」のたとえのごとくパッと散って逝った陸さんの冥福をこころから祈る。

（内藤　博記）

第63期（昭和36年卒）

十一回目を迎えた東京支部同期会は七月三日（土）有楽町のニュートーキョー内桃杏楼で一次会・ミュンヘンで二次会を開催致しました。今年の案内状には何と「生者必滅」等という言葉も飛び出し、五十一年生きてきたそれぞれの人生をもう一度見つめ直す時が来ていることを改めて感じさせるものでした。初参加の中村崇・佐々木敏信両君の出席を得三十名が夕方四時から集い、解散したのが十二時頃だったでしょうか。瀬戸正信君と浅間先生の訃報に接し一瞬案内状の言葉がよぎり、心中複雑なものがありました。「瀬戸君と浅間先生には心から御冥福をお祈り致したいと思います。」

納骨を終えてすぐ函館からかけつけた浅間先生のお嬢さん元子さんも途中から加わりいつもとは一味違った落ちついた会になったように思いました。

会の途中六九期の美女二人が会場を間違えて姿を現した時には一同びっくり、でも大歓迎を受け小林幹事から皆に紹介があり、一人は同窓会でピアノを担当して下さる米木さん、もうひとかたは増田さんでした。男性諸氏の引止めも功をせず二人は自分達の会場へ走り去ってしまいました。このようなハプニングに端を発した各期の交流会形式の会もいいのではないだろうか。同窓会の先輩の方々をお呼びしてお話しを伺ったりするのも今後の同期会をより豊かにしてくれるのではないかと思いました。（土橋道子記）

函中三八会

（第六十五期・昭和三十八年卒）

本年度函中三八会は、七月三日（土）、午後六時三十分より、東京・新宿東口の〝パプ・セントラル〟で行われた。

同期会は、昭和五二年に第一回目を行ってから、毎年一回、おおむね六月末か七月上旬に実施しているが、〝年に一回あるから、今回は欠席でも来年〟と、考える方が多いのか、約百三十人に案内を出しても参加者は二五人から三十人程度。そして、欠席の通知は三五～四十人からと、幹事としては寂しい限り。

今回は、岩手県盛岡市と山梨県若草町からの遠来の参加者も含め、男十四人、女十一人の計二五人が参加した。当初は、参加者がもう少し多いと考え、四十人は収容可能な部屋を予約したが、急遽小さな部屋に変更した。なお、参加者には、欠席者からの近況報告を印刷したものと再来年に行われる函中百周年記念事業の資料を併せて配布した。

会では、開会の前に、六月二七日に急逝された河合誠君（五組）の冥福を祈って一分間の黙祷を行った。河合君は、昨年の同期会も含め、これまでに数回出席。今回も出欠の連絡はなかったものの、会があることを回りの人に話されていたとのこと。

この後、再会を祝して乾杯。しばし、懇談に移った。毎年一回は顔を合わせるとは言え、やはり久し振りに会った人も多く、積もる話に花が咲いていた。

ある程度酔いも回ったところで、銘々の近況報告を行う。しかし、報告もそこそこにカラオケ大会となった。もっとも、一所懸命歌を歌って者はいるものの、話に熱中する人が多く、お互いに席を代えて、高校時代の思い出話などをしている人が大部分であった。

午後十時三十分、会場の関係で、終了を宣言。記念撮影を行った後、次回の再会を約束して閉会した。

一旦閉会となったものの、別れがたく、約二十人が近くのビアホールに移動しての二次会に。ここでも汲めども尽きない話に花が咲いた。

（菅原大作記）

火ばしら会（第69期・昭和42年卒）

平成五年七月三日数寄屋橋ニュートーキョーで火ばしら会東京支部第八回同期会が開かれました。卒業して二六年立ち初めて同期会の出席が、叶いました。

函館から三重県津市に移り十八年が過ぎすっかり引きこもってしまっておりました。同期会の通知が来る度に皆様にお会いしたい、様子が知りたいと思っていました。今年こそ思いきっての出席でした。とてもなつかしく、楽しく二六年前にタイムスリップした感じで、四時間があっという間に過ぎました。皆様すごくはつらつとして、地方から出席の私としては圧倒されそうでした。でも刺激にもなりました。クラブの吹奏楽の話になるとつきる所がないくらい夢中になっていました。帰宅しましてからもまださめやらずひとり浮き浮きしております。ふっと思い出したのですが、挨拶の時「相馬さん（旧姓）函館弁そのままだね」と言われましたが、同期の方達は東京の言葉になっていました。私は死ぬまで函館弁そのままと思います。来年もきっと出席しようと思います。今回出席するに当り幹事の梅田さんにはいろいろお世話になりありがとうございました。来年三重県で「世界まつり博」が開催されます。ぜひお出掛け下さい。

（岩城恵美子記）

会員短信

（**昭6卒佐々木五郎**）東京白楊だよりお送り下され、有難うございました。各期だより、会員短信等愉快に拝読致しました。広報担当他、役員の皆様に感謝致しています。（**昭8卒佐々木孝充**）環日本海イベントはこの10月25日にロシア、中国、韓国、及び日本海側の日本各県より、男女混合駅伝マラソン挙行で7月より準備、研修を重ね一カ月余りとなりました。県、市民の熱意と努力で成功させたいと頑張っております。（**昭9卒佐々木八朗**）今年9月15日敬老の日に因んで、都と市から敬老金を貰う年になりました。函中卒業時親無く、よく今日まで生きられたものと感慨を新にすると同時に、天地の恩恵を感じています。（**昭9卒秋浜晴彦**）東京で月2回、同期の有志が顔を合わせております。函館での会合も年一回東京から押しかけますが、ついで校舎を見に行ったことはありません。昔を偲ぶものは何があるのでしょうか。遠くに見えた砂山も見られなくなりました。（**昭15卒田沼静一**）この9月で満の古希を迎えました。福島県のいわき明星大学というところで働かせてもらっております。田舎の広いキャンパスにホトトギスやキジが出没、年寄りには良いところです。（**昭16卒小山俊介**）持病をかかえ乍ら何とか行きのびて居ります。目下ハーフリタイヤの身分でなかなか自由な時間が持てません。今夏51年振りに札幌同期会への感激の初参加。皆様の御健闘を祈ります。（**昭16卒井筒吉彦**）9月11日に東京在住者の同期会を催し、84才になる林信義先生（国語）も昨年に引き続き出席されました。京大を出てアメリカへ行き、宇宙物理学教授をしていた、同期生の松島訓君の訃報や、本人又は夫人の病気中の知らせなどが多く、会に出席できる我々は幸いである等、70才に近いグループを一入感じさせられました。結論…函中百周年までは、〝死んでも〟生きよう。（**昭16卒寺井章**）校舎改築で面目一新されましたが、木造の旧校舎時代が懐かしく思われます。兄弟6人、従兄弟2人、同時代に通学した校舎です。函館に帰郷することも少なく残念ですが、来年北海道一周のドライブ旅行の際には新装の校舎を訪れたいと思っております。（**昭16卒大森志郎**）10月1日から2週間、QCサークル洋上大学団長として香港、台湾に寄港して洋上研修に参ります。海外のQCサークルとの交流会を行います。（**昭17卒浦田常治**）作品集〝風の贈り物〟（歌曲7合唱曲1童謡3）音楽之友社より出版、御希望の方に差し上げます。お知らせ下されば送ります。（**昭17卒田村正平**）元気でやっています。但し方方に御無沙汰、失礼をしながら……。昨年の「獅子の会」で本当に久し振りで旧友に逢い、「玄冥の北の一道」を歌い感動しました。（**昭20卒篠田作衛**）東京白楊だよりと大会のご案内嬉しく拝読しました。今回の東京だより、野田新校長と二上支部長のご挨拶、共に心意気と若々しさが溢れていて感動しました。又お忙しい中の菅原氏の講演記録、その後のバブルの経緯と重ねてみて誠に感慨深く感じました。難しい時代になり、国際化、情報、ハイテク化の波の中で、母校は「未来の負托」に応えて頂きたい。私達も精いっぱい声援を送りましょう。（**昭23・24卒平野拓夫**）楽しい「ニュース」いつも楽しみにしております。10月15日久しぶりに皆様にお会いできるのが嬉しい今日このごろです。（**昭27卒鈴木良子**）白楊だよりを拝見し、とてもなつかしく40年の月日の流れに高校時代を思い出しております。6月新宿で同期会があり、健康についての話し合いで一杯でした。今後も皆様の御健勝をお祈りします。（**昭30卒小竹嘉子**）今春3月4日主人が他界してしまい、あまり急なことで、何をどうすればよいのか困りつつ、月日の過ぎるのが早くて、あ！という間に今年も暮れそうです。（**昭32卒桶直義**）小生転勤族で、一昨年東京に来ました！支部幹事の方々には大変お世話様です。今後もいろいろ楽しみにしておりますので宜しくお願い致します。（**昭33卒相馬孝至**）今年20年振りで函館の地を踏みました。建物が高層化になり、時任町の旧家もはっきりしませんでした。函中の正面玄関の前で新築中の校舎のすばらしさ!!今後ともよろしくお願いします。（**昭33卒伊藤紀子**）東京白楊だよりは、故郷と私をつないでくれる何よりのものです。同期会に来年は出席したいなと考えております。（**昭34卒伊東紀保**）先日久し振りに函館へ行って来ました。朝市の賑わいと千円で6パイのイカの安さに驚きました。徒歩で函館山に登り、帰りに高田屋嘉兵衛の像をながめつつ、彼の偉大な事蹟が北方領土の早期返還につながればいいが、の思いを強くしました。（**昭和39卒小野豊**）時短が叫ばれるなかで、相変わらず午前様の毎日です。ニューヨーク（6年）－東京（1年半）－ロンドン（1年）－東京（6ヶ月）今度はいつどこへ?!（**昭41卒重松健一**）同窓会名簿興味深く拝見しました。一緒に机を並べた皆んなが、各方面で活躍している様子をかいま見て、心うれしく思いました。（**昭42卒浅田香**）二年前に法事で帰函した時、校舎の改築が始まっていました。友人と思い出話に華を咲かせ、白楊祭の準備に追われた日々を懐かしく思い出しました。お世話になった先輩のあの頃の顔がよみがえります。いつか同窓会に出席してお会いできる日を楽しみにしております。（**昭44卒片岡進**）幕張新都心の高層ビル群を見渡す幕張本郷に住んで7年になりました。何とも情けない千葉ロッテマリーンズですが、マリン・スタジアムからはいつも大きな歓声が聞こえてきます。（**昭51卒山平匡人**）東京白楊だよりをお送り頂きありがとうございます。卒業して16年経ちました。10月15日の親睦会には残念乍ら参加できませんが、近々8年半振りに東京に戻る予定です。（**昭54卒石田人士**）サラリーマン10年目、結婚8年目、長女6才長男3才、ふり返ると平凡な人生かな、とも思います。白楊だよりを見てなんとなくなつかしい気がするのは、自分も歳をとったということなのでしょうか。（**昭54卒橋本祐子**）住所が変わりました。結婚して姓も変わり、早いもので、卒業してから10年以上もたっているなんて…信じられませんね。東京で同期会!!っていうのも、いつかやりたいですね。（**昭54卒松永久**）先日久し振りに中部に行ったところ、パルテノン宮殿風の立派な建物に非常に驚きました。まだ、旧体が残っていてホッとしました。

（記念写真も撮りました。）

〝高校野球について〟
（油断大敵）

34期　伏見滋夫（昭和七年卒）

今年も高校野球大会の時節がやって来た。

沖縄県をはじめとして各地で予選がはじまっております。

今から六十余年前私も函館中学の一員として甲子園を目ざして、この大会に参加した。

今は道南だけでも二十数校の野球部があるとのことですが我々の時代は北海道のすべての高校野球部が札幌市にあつまっても三十校位でした。この時は札幌の北海中学（今の北海高校）札幌商業の二校と函館商業、函館中学の四校が優勝候補でした。試合が進み準決勝に残ったのは予想通り北海中、札幌商業、函館中学、函商は三回戦で脱落して伏兵の宝蘭中学が出て来ました。

準決勝戦は右の通りでした。

函館中学――宝蘭中学

札幌商業――北海中学

宝蘭中学は三回戦で辛くも函館師範にかったティーム、函中は練習試合、リーグ戦で併せて四戦四勝でしたので、相手の室中をすっかり見くびってしまいました。ここが勝負のこわいところで決して相手をナメてかかってはならないのでした。ゲームは前半五回まで三－一で函中がリードしておりましたが五回に突然、室中が奮起してエラーがらみで、テキサス安打が三本つづき一據五点をとられ、結局七－四で函館中学が破れ、甲子園への道は絶たれてしまいました。

このチョットした油断、相手を見くびったことが敗戦につながり、悔んでも、悔んでも、悔みきれないことでした。

実社会に於ても、これと同じことが云えると思いますが……

「油　断　大　敵」です。

傘　寿

35期　藪越　甲平（昭和八年卒）

八月下旬、函館の湯の川温泉で、昭和八月卒業の同期生会が催されるが、既に二九名の参加申込があり、集まる連中は、それぞれ傘寿（数え年八十歳）、又はその前後の年齢なので、まさに壮観というべきであろう。

不幸にして病により故人となられた人（私達の時代には、戦死、戦病死、行方不明も数多い）、又現在老齢のため体調を崩されて、出席出来ない人もあるが、よくこれだけ大ぜいの参加申込があるとは驚きに堪えない。

さて「人生わずか五十年」の時代には、六十歳になれば、「還暦」と称して、赤いチャンチャンコを着せて祝ったものだが、今では六十歳はむしろ人生の折返地点であろう。

七十歳（古希）七十七歳（喜寿）も過ぎ、八十歳（傘寿）を迎えた私達は、これからの余生をどのように過ごすか常に考えているが、高齢者のしあわせの基は、まず健康であるが、体は丈夫でもボケ老人になったら大変である。

ある老人が、七十八歳で生涯を終えるときに「私の人生は穏かな平和なものでした」と云って逝ったときいたが、その人の生涯は本当に幸福であったのか、或は達観した死生観を持って、常日頃死に対する心の準備をしていたのかも知れないが、私達の過去の環境はあまりにも波乱に満ちていて、未だその老人の心境には達しきれない。

大正から昭和初期の不況、満州、支那事変、太平洋戦争、戦後の混乱と動揺、日本歴史にかつてない波乱の連続であった。こんな時代を生き抜いてきた連中が、来る八月に一堂に会し、昭和初期五年間の中学時代の懐古から、逝去した友を偲び、この混乱と動揺の時代を、いかに生き抜いたかを語り合い、想い出は尽きず、深夜に及ぶことは想像に難くない。

今から既に感無量のものがある。

短歌と私

37期　釣谷　光博（昭和十年卒）

函中の四年の時、私は北大予科の工類を受験した。結果は、正に「井の中の蛙大海を知らず」で、見事に振り落とされた。数学、物理、化学が大好きで、自分では理科系統に進むべきであると、思い込んでいたのが、この仕末で、がくんと来たのが事実である。昭和九年三月末、受験を終えて帰ってみると、函館は二十一日の大火で惨憺たる有様であった。折からの吹雪が、荒涼たる焼野原に舞っていた。

点々と残る土蔵や春吹雪

之が、私の詩歌らしいものの処女作である。その時と前後して、安保徳輔先生に、歌をつくってみないか、と言われ、五十首位を一気に作りあげた。短歌に興味を持ったのは三年生の頃で、啄木の歌集に感激して何度も読んでいたので、作歌には、そんなに抵抗を感じなかったのである。之を先生に提出すると、何と、その殆んど全部を校友会誌に掲載していただいたのである。どんな歌だったか、忘れてしまったけれど、そこで初めて、自分は文科に進むべきだろうか、と考えたのである。当時、叔父の家に寄宿していたので、放課後は、書庫に閉じこもり、日本文学全集、世界文学全集を手当り次第に読み漁り、殆んどを読破していた。この事からも、相当に文学に興味があったものと思われる。

五年生になると、安保先生から、交友会誌の短歌はお前が選者だ、と言われ、当惑したことを覚えている。どんな歌を選んだか、全く忘れてしまったけれど、そんな事のあったのを思い出している。

その後、高商に行ってからも、折に触れて歌をつくっていたが、系統的なものではない。

時代は移り、昭和四十八年頃になって、亡き妻が、何かの縁で短歌の会に入った。そして私にも入れと云う。半年程遅れて私も入った。潮音社という太田青丘先生の主催する会である。写実を主体とするアララギ派ではなく、心象を重視する、新古今集系統の歌誌である。何とか今まで続けて現在その同人と云うことになっているが、之は年数によるもので、うまいからではない。歌は、人格、教養の現れであると言われ、とても私には立派な歌はつくれない。併し、その時々の感激を素直に表現することに努めており、ボケ防止にはよいと思われる。

平成二年に、私は従軍時の経験を纏めて、「私は主計軍曹だった」と云う本を自費出版して知友に配布した。この時に、実は頁数を水増しすることを狙って、所々に短歌を押入したのだが、之が状況を浮き出させるのに、相当効果があったので

はないかと思っている。

荒涼と立木もなくて北満の夕乾きて
兵舎並べり

南京の征旅の宿は荒れ果てて
雨、音もなく青桐に降る

敵弾のヒュウヒュウ鳴るに地に伏せば
夜の草強く匂ひ放てり

春浅き丘に転びて復員の船待つ兵は
しらみ採りする

野良仕事終へたるままの手をつきて
帰還の吾に頬染むる妻

以上、数首をあげてみた。之からも、生涯、歌をつくり続けるであろう。

引退してもくじけないで

44期　梅田良太郎（昭和17年卒）

『青春とは心の若さである　信念と希望に溢れ、勇気に満ちて、日々新たな活動を続ける限り、青春は永遠にその人のものである』

これ私の師であり上司であった松下幸之助氏の言葉である、師は人間性溢れ、経営者としても日本を代表する人物の一人であった。私は師の薫陶と指導を頂きながら勤務させてもらった一人である。師は松下電器を引退した後私財を投じて社会事業に意を盡された。

繁栄することが平和と幸福に連がるとPHP運動を起こし、霊山顕彰会を設立し明治維新の志士達を碁石に刻みその功労に対し顕彰を行っている。続いてあす・か保存財閥を設立遺跡を後世に残すため努力を盡し、神道大系編纂会を発足させ斯界の学者による古典文献の発掘考証編纂を行っている。所謂　国家的な事業を引受けたのである。晩年に入り日本の政治について若者を再訓練すべく松下政経塾を開き、有能な志をもつ人物が主旨に共鳴し、時には塾長自ら寝食を共にして教育に当ったのである。現在卒業生は各地で政界財界で活躍している。「問いて知り知りて思慮し察して行え」がモットーだった。学は学生の頃先生を真似ることが学ぶだそうである。それに反して学問は学んで問い、問いて学ぶことで、学のある人と学問のある人の違いがあると考えるのである。そして、「見ること博ければ迷わず、聴いて聡しければ惑わず」の心境に達するのだと思う。私も引退した老人だが自分の日常を観るに汗顔のいたりである。

そんな私を臥牛山は笑っているだろう。

（元松下電器産業㈱社会業務本部勤務
現山鹿素行会委員）

"ゴルフとヨーガで健康維持"

46期　渡辺　保二（昭和19年卒）

私はゴルフを始めてから34年になります。又亡父が埼玉のさる名門ゴルフ場の会員であったのでこれを継承s46年に会員になりました。以来クラブの公式競技で手にした優勝杯は今日まで7個になります。顧みますと40歳台から60歳の前半までは体力にも恵まれ割合良いスコアで回っていましたが最近では体力の衰えや運動神経の鈍さも加って大叩きするなど初歩的ミスも出てハンディキャップは下がる一方です。気がつくとあと2年で古希を迎える歳になりクラブからは赤チョッキ、赤帽子を頂く予定で、まさに日暮れて途遠しを痛感している次第です。私は軽量級なので飛距離は余り望めず専ら方向性を重点に心掛け、どうやらドライバー、バッフィー、クリークなどはフェアウェーをキープするようになりました。これを結果としてスコアメークに貢献しているようです。たまたまクラブの仲間からヨーガをやると体力がつくし体も柔らかくなるとの話を聞き毎週1回ヨーガ教室に通っています。ハタ、ヨーガを始めてから1年半になりますがおかげで肩の力が抜け、腰の回転もスムーズになり以前より飛距離が出るようになった。又年を取ったらアプローチとパットで稼げとよく言われていますが、グリーン回りの小業にも力を入れていきたいと思っています。私のクラブには幸いにして45期の中村哲夫氏、60期の伊藤威史氏が居りゴルフを通じて懇親を深めています。又同期のゴルフ仲間は10人程居り10年前から年に4回ホームコースを持ち回りでゴルフを楽しみ旧交を温めております。

私のクラブでは会員の平均年齢は65歳で最高は103歳の方を筆頭に90歳以上が38人、80歳以上が279人、70歳以上が421人、60歳以上が623人、50歳以上が521人、40歳以上が266人、40歳未満が62人の構成になっています。

従って私はクラブではまさに青年であり欲張りかも知れませんが、あと20年はゴルフを続けたいと思っています。私は現在ゴルフを週1～2回、ヨーガを週1回やっております。ゴルフには朝六時に家を出ますが、朝起きは三文の徳なのかおかげで病気知らずです。又ヨーガを始めてからはストレスもなく体はすっかりリラックスになりました。そしてゴルフを通じ今まで多くの友人が出来私の人生をより豊かにしてくれたのは大きな収穫と思っています。これからもゴルフの出来る喜びを感謝しつつ更に精進していく積りです。

「青春」をうたった米の詩人ウルマン

48期　武田　好司（昭和20年卒）

「年を重ねるだけでは人は老いない。理想を失うとき初めて老いる」青春をうたった詩で、戦後日本の経営者の心をとらえた米国の詩人、サムエル・ウルマン（1840～1924）。その住んでいた家を記念館にしようという運動に宇野収関西経済連合会会長（東洋紡名誉会長）らが協力、約2、800万円の資金を集め、東京のホテルで平成5年7月6日、贈呈式をした。との記事を朝日新聞の7日付の朝刊で読んだ。

ウルマンは、ドイツから米アラバマ州に移住した敬虔なユダヤ教徒で、金物店などを経営するかたわら詩を書いた。米国でも無名の詩人だったが、「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う」とうたった「青春」が戦後まもなく日本で紹介された。第二次大戦中、一人の日本人兵士がコレヒドール島のマッカーサー将軍司令部に残されたものからこの詩を写して来た。1992年10月にウルマン記念館をつくろうという動きがアラバマ大学などで持ち上がり、日本でも費用の半分を負担することになった。

宇野氏、盛田昭夫・ソニー会長らが発起人となって経済人やファンに呼びかけポケットマネーを出してもらった。

記念館は、今月から改修工事を始めて、94年3月に開所する。贈呈式にかけつけたアラバマ大学のマルカム・ポルテラ副総長は「ウルマンゆかりの品を展示するとともに、日米関係をより深めるための教育施設として使いたい」と話しているとのことである。

詩集にある「青春」のオリジナルからの訳文を掲載して置こう。

青春

サムエル・ウルマン

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな手足ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは臆病さを退ける勇気、安きにつく気持を振り捨てる冒険心を意味する。ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心はしぼむ。苦悩・恐怖・失望により気力は地に這い精神は芥になる。

60歳であらうと16歳であらうと人の胸には、驚異に魅かれる心、おさな児のような未知への探究心、人生への興味の歓喜がある。君にも吾にも見えざる駅逓が心にある。人から神から美・希望・勇気・力の霊感を受ける限り君は若い。霊感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、悲歎の氷にとざされるとき、20歳であらうと人は老いる。頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、80歳であらうと人は青春にして已む。

俳句　五句

○納采の儀あり薄陽に柿若葉
○蝦根蘭咲き鎌倉小径心澄む
○あじさいの艶やかなれば傘さして
○千歳の牛島の藤今盛り
○秋霖のおと聞く風呂や日旺日

"第17回 親睦大会"

- **とき**　平成5年10月15日㈮　午後5時より
- フルートとハープによるリラックスコンサート
- **演奏**　星川　龍二（第64期・昭和37年卒）
- **プログラム**

『アルルの女』より　ビゼー作曲
『シチリアーノ』　フォーレ作曲
『春の海』　宮城道雄作曲
その他
※ハープ奏者　伊藤元子さん

訃報

第56期（昭和29年卒）**黒川陸朗氏**が平成5年3月13日剥離性動脈瘤で逝去されました。同窓会発足時から理事として会発展の為に永らくご尽力いただきました。

元函中数学教諭**浅間友吉先生**が病気療養中のところ6月27日、84歳にて永眠されました。葬儀委員長は元函中校長の堂高榮治先生。

浅間先生は明治43年北海道早北生まれで昭和5年道立旭川師範学校を卒業後函館市立高砂小学校に勤務。その後北大にて理数科の免許を取得、昭和16年から30年間函中にて教鞭を執り、バスケット部部長として終戦後間もなくの物資充分でない時代に全国大会出場を果しました。

御二人のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

平成4年度東京支部会計決算書

収入の部		支出の部	
前年度繰越	2,956,263	総会関連費	1,211,719
総会費（154名）	1,078,000	会報関連費	589,828
年会費（943名）	1,886,000	事務費	274,752
利息	56,543	会議費	166,034
雑収入	121,040	雑費	298,512
		次年度繰越	3,557,001
計	6,097,846	計	6,097,846

編集後記

会報の編集を担当して二年目。今年のはじめより支部役員と打ち合わせを重ね、会員の方々にどういう情報が喜こんでもらえるか思案の末に函館に関するものとして森本貞子氏の日経に掲載された記事を読んでもらう事にしました。森本氏は函館市文学館に展示された作家の一人でもありますので、合わせて文学館開設の記事も載せる事になり、お盆休みも返上して編集作業を進めていたところ、森本さんは函中36期の大先輩、東大名誉教授で地震学の大家森本良平氏の奥様である事が分り編集子大いに慌てる一幕となりました。後日会報に掲載する事を心良く御許しいただき〝函館の女性像の一部〟を知る機会を得ました。

さて今年のテーマ〝組織の充実化〟の一環として〝評議員の何たるか〟も考えてもらおうと福津理事の一文と報告記を入れました。またゴルフの親睦会もその計画の一端です。大先輩から女性を含む若い人まで年齢を越えて楽しい会にしていきたいと思ってます。それもこれもすべて評議員の御協力によるものと期待しております。編集子

発行　白楊ケ丘同窓会東京支部
編集責任者　小林　嘉則
支部事務所
〒一六〇　新宿区新宿一－一四－六（御苑ビル）
スパース販売㈱内
TEL　〇三(三三五二)六二八一